

「青年海外協力隊OB」

# 米本 竜馬さん

YONEMOTO Ryuma

## 洪水被害を受けた高齢者を支援

1階部分が水に浸かった家屋、機能しなくなった工業団地、避難所で暮らさざるを得ない人々…。昨年10月にタイを襲った大洪水は、日本を含め、世界各国で大きく報道された。7月から降り続いた大雨によりタイ北部から首都バンコクへと流れるチャオプラヤ川が氾らんし、日本企業が多く進出しているアユタヤの工場地帯を含め、バンコクの都市機能も一時的に麻痺した。12月にはやっと水が引いたものの、住居や建物の壁や床は泥だらけ。家財が流されたり、長期間水に浸かっていたせいで傷んだり、人々の生活が元通りに

# JICA Volunteer Story

PROFILE

1976年岡山県出身。2006年に都立保健科学大学卒業後、理学療法士として病院で勤務。2010年1月から2年間、青年海外協力隊(理学療法士)としてパプアニューギニアで活動。帰国後、2012年2月から1カ月間、甚大な洪水被害を受けたタイに派遣。

# 「洪水被害から立ち直り、健康的な生活を取り戻してほしい」

昨年秋に50年ぶりともいわれる大洪水に見舞われたタイ。多くの家屋が浸水し、人々の日常生活、そして経済活動に多大な影響を及ぼした。数カ月が経過しても被害のつめ跡が多く残る中、洪水からの復興支援ボランティアとして3人の青年海外協力隊員が派遣された。



入居者と工作を行う米本さん。「理学療法士としてお年寄りと接してきた経験を生かすことができました」

なるにはまだ長い時間が必要な状況だった。

首都バンコクから北へ50キロに位置するパトウンタニーも、洪水被害からの復興が急がれていた町の一つ。そこで、2012年2月にこの町に緊急派遣されることになったのが、米本竜馬さん(理学療法士)、廣瀬美香さん(作業療法士)、奥村拓矢さん(PCインストラクター)の3人の青年海外協力隊員だ。配属先は、家庭の事情などにより自宅で生活することが困難になった高齢者が共同生活を送っている高齢者社会福祉開発センター。廣瀬さんがこのセンターで2012年1月までの2年間、協力隊員として活動していたことが縁となり、今回の派遣が実現した。派遣期間は1カ月。施設の復旧や入居者の生活の質を向上させることが目的だ。

「二時避難していた入居者たちは12月にはこのセンターに戻ってきていました。私たちが赴任した時は、洪水で流されてきた大きなゴミが撤収され、ようやく施設が機能し始めたころでした」と米本さんは振り返る。理学療法士としてパプアニューギニアでの活動を終え帰国したばかりだったが、タイは活動中にリンパ浮腫についての研修を受けるため訪れたゆかりのある地だったため、今回の短期派遣への参加を決めた。

## 3人の専門性を生かして 入居者の健康増進を目指す

まずは現場でどのような支援が必要とされているか知るために、入居者にアンケートを取った。すると、「個人用の棚が流されてしまったので、代用品が欲しい」「腰や膝が痛いので和らげる方法を知りたい」「車いすの修理が必要」などの声が上がってきた。「アンケートを基に計画を立て、できることから始めることにしました」と米本さん。設備の復旧のため、水に浸



a.ポスター作成用に翻訳したタイ語をセンター長のシティアポー・チューイナークさんにチェックしてもらった廣瀬さん(中央)と奥村さん(右)  
b.体の痛みを和らげる体操を図説するポスター。企画から写真撮影、デザインまで丁寧に作業し、完成したのは活動最終日  
c.プランターや花だんに花を植える入居者と一緒に隊員たちも作業。こうした活動が彼らの心のケアにつながった  
d.最初はセンター施設の復旧が主な活動。浸水で汚れた壁を清掃し、ペンキを塗り直す

かって汚れたまま放置されていたベッドの清掃や壁のペンキ塗り、パンクしていた車いすの修理、また、入居者の心のケアの一環として花が枯れてしまったプランターと一緒に花を植えるなど、活動は多岐にわたった。米本さんは「センターのスタッフと入居者のニーズが違ったので苦労しました。スタッフの優先課題は施設の清掃や修理でしたが、入居者たちはそれぞれ個別の要望を抱えていました。タイでは人間関係が非常に大事。この施設で活動経験がある廣瀬さんと、同国で協力隊員として活動していた奥村さんがそれぞれの立場の人に気を配りながらうまく調整してくれたので助かりました」と話す。

3週目からは、各自の専門性を生かした活動へとシフトすることに。入居者が、心身ともに健やかに生活できるようにしてほしい。その願いを込めて3人が取り組んだのは、健康増進に役立つ情報が載ったポスターの作成。首、肩、膝の痛みを和らげるために自分でできるエクササイズや、笑顔が健康にもたらす効果、野菜から取れる栄養素の解説、施設紹介の4種類を作成して施設内に掲示することで、できるだけ多くの人々に情報が伝わるようにした。「私と廣瀬さんが専門知識を生かしてどんな内容にするかを考え、写真を撮り、その素材を使って奥村さんがパソコンで作成してくれました。私と廣瀬さんは医療が専門なので専門用語を使いがちだったので、奥村さんがその表現は難しいんじゃない? など意見を出してくれて、分かりやすいポスターを作成できました。まさに3人の協働作業でした」と語る米本さんは振り返る。

お互いの専門性を生かしてチームとして活動した3人。あつという間の1カ月だったが、人々の声を聞き、ニーズを見極め、柔軟に対応した彼らの活動は、入居者の笑顔を引き出すことができたに違いない。